



日文 701598314

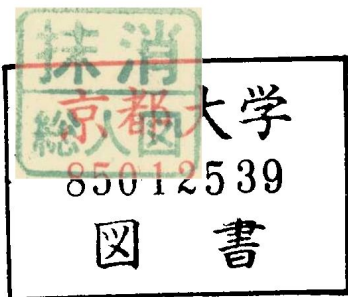
183910

中国古典文学大系 49

平凡社

海上花列伝

韓邦慶作 太田辰夫訳



訳者紹介

おとだ たつお
太田辰夫 1916年東京生。東京外国語学校専修科卒。
現職 神戸外国語大学教授。文学博士。専攻 中国語
学。主著『中国語歴史文法』(江南)『現代中日辞典』
(共著・光生館)『古典中国語文法』(大安)『西遊記』
(共著・平凡社)『平妖伝』(平凡社)

中国古典文学大系 全60巻

海上花列伝

第49巻

1969年5月12日 初版第1刷発行
1984年12月15日 初版第11刷発行

訳者 太田辰夫

東京都千代田区三番町5番地

発行者 下中邦彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区 株式会社 平凡社
三番町5番地
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1969 Printed in Japan

海上花列伝主要人物一覧

排列は男女別・登場順。ただし同姓は一括した。執事・ボーイ・女中などは原則として主人の項に記し、重要なもの若干を最後に置いた。

㊦ || ボーイ。㊧ || 嬢嬢エビシイ（既婚の女中）。㊨ || 大姐ドウヂヤ（未婚の女中）。

趙樸齋 十七歳。友人の張小村とともに職を求めて上海へ出たが、

芸者の陸秀宝に欺かれ、また王阿二となじんで零落し、ついに車夫となる。妹の趙二宝が芸者になつてからは、芸者屋の主人におさま

り、大姐の阿巧とねんごになる。母は洪氏。おじは洪善卿。

洪善卿 鹹瓜街の永昌藥局の主。洪氏の実弟。王蓮生の親友で買物そ

の他の使い走りをはきうけている。周双珠の旦那。

張小村 趙樸齋の郷里の隣人。張新弟・張秀英の従兄。上海に出て

十六鋪の大生米行に就職。王阿二とは特に親密である。

張新弟 張秀英の弟。質屋の番頭の翟の世話で南信質店につとめる。

莊荔甫 ブローカー。陸秀林の家にしげこみ、儲け口を捜している。

陳小雲 南登錦里の祥發呂宋票店の主。番頭は胡竹山、執事は長福、

馴染の芸者は金巧珍。

黎篆鴻 杭州の大富豪。于老徳はそのたいこもち。娘は朱淑人と婚約

呉松橋 趙樸齋の郷里の友人。床屋の呉小大の息。義大洋行に就職。

王蓮生 洋行帰りの高官。甥や執事の来安とともに五馬路の公館にや

もめ暮し。張蕙貞を掘り出して援助し、もとの沈小紅が大騒動

を起こす。小紅が役者の小柳兒と通じていることを知り、蕙貞を妾

にするが、蕙貞もまた甥と関係し、蓮生は失意のうちに江西へ赴任

する。親友は洪善卿、執事は来安、役所の同僚に呂傑臣・楊柳堂。

朱蕙人 中和里に公館がある。両親なし。執事は張寿、芸者は林素芬、

朱淑人 十六歳。蕙人の弟。周双玉と馴染になるが、黎篆鴻の娘と

婚約したので、双玉から無理心中を迫られ、洪善卿の口ききで解決。

羅子富 山東生まれ。江蘇の知事候補。出張で上海に滞在。古馴染の

蔣月琴をやめて、黄翠鳳の旦那となつたため、さんざん愚弄され、

金をまきあげられる。豪放で間の抜けたところのある汚職官僚。執

事は高升。親友は湯嘯菴。

湯嘯菴 朱蕙人の親友でその仕事を手伝っている。羅子富とも親しい。

萬仲英 蘇州生まれの貴公子。永安里の徳大匯劃莊。芸者は呉雪香。

徐茂榮 役所の捕吏。ごろつきの仲間。

陶雲甫 上海旧市内の名家の子弟。両親なし。芸者は覃麗娟。

陶玉甫 二十四歳。雲甫の弟。妻は早く死亡。李淑芳を後妻に迎えよ

うとして反対され、淑芳は悶々のうちに病死。流芳を可愛がる。

小柳兒 青年俳優。沈小紅の情人。

施瑞生 南市に住む漁色の青年。陸秀宝・袁三宝と遍歴し、趙二宝を

騙して芸者にさせ、義妹の張秀英とも関係があるらしい。

李鶴汀 地方の資本家。上海の旅館に滞在しちう賭博に熱中し警察に

捕えられる。許されて帰郷、おじの李実夫と再び上海に来、大敗し

て財産を失つたうえ、執事の匡二に持ち逃げされる。芸者は楊媛媛。

李実夫 鶴汀のおじ。資産家であるが吝嗇。上海に来て諸十全に病毒

をうつされ帰郷、治療のため再び出て来る。

周少和 もと高官であったが免職となり、賭博師をしている。

姚季蕙 官僚。酒家であるが恐妻族。衛霞仙のところへ通つていたが、

妻がどなりこんで恥をさらしてから絶交。のち妻の公認を得て馬桂

生を馴染にする。

倪大東門の広亨南貨店の若主人。周双宝を妻に迎える。

銭子剛 後馬路の公館に住む。失職中。黄翠鳳の意中の人。

翟 大馬路北信質店の番頭。

齊韻叟 山家園に一笠園という豪壮な別邸をもつ頭官。今は引退。蘇

萃香を妾とし、その実妹である蘇冠香を邸内にかくまっている。交

際好きの風流人。名士を集め酒宴を開くことが多い。琪官・瑤官は

寵愛の歌姫。総管の夏余慶の下に使用人は小贊はじめ百人あまり。

高亜白 江南で名高い文人。一笠園に寄寓する。芸者は姚文君。

方蓬壺 蓬壺釣叟ともいう。新聞にときどきへたな詩を出す老詩人。

文君玉 という芸者の弟子がある。趙桂林を妻とする。

尹痴篤 亜白の親友で斉韻叟の居候。芸者は張秀英と半玉の林翠芬。

華鉄眉 喬老四の公館に泊まっている。王蓮生・頼三公子と親交あり。

性質は優柔不断。執事は華忠、芸者は孫素蘭。

史天然 史三公子・史公子・三公子ともいう。南京の名門で翰林の出身。保養のため大橋に滞在する間に趙二宝を寵愛し、結婚を約する

が、再び上海にはもどらない。執事は小王。

馬竜池 馬先生ともいい、斉韻叟の顧問役。芸者は衛霞仙。

頼三公子 あだ名は癩頭砲。海軍関係？ 狂暴で恐れられている。

老包 抛球場の宏寿書坊。プロカーを兼業。ひょうきん者。

史三 抛球場の生全洋広貨店の主。

混江竜 ごろつき。黄二姐の情夫。

喬老四 大馬路に公館あり。芸者は周双珠。喬老七という弟あり。

寶小山 流行の漢方医。

阿德保 周双珠の家のボーイ。妻の阿金が朱蕩人の執事の張寿と通じているので喧嘩が絶えない。息子の阿大は阿金の味方である。

小賢 斉韻叟の下僕。聡明で、尹痴篤・高亜白から詩文を教わる。

陸秀宝 西棋盤街聚秀堂。公二。はじめ半玉。客は施瑞生・趙樸齋。

美貌で淫蕩。㊟楊家梅。

陸秀林 秀宝の姉。旦那の莊荔甫に満足している。

王阿二 新街。花煙間の尤物。客は張小村・趙樸齋その他。

衛霞仙 二十三歳。尚仁里。姚季尊の妻がおしかけて来たとき、得意の弁舌で撃退。客は他に翟・馬竜池。

沈小红 西番芳里。ヒステリックでサデイの傾向あり。王蓮生が張

蕙貞に家を持たせたので、蕙貞を殴打。王蓮生に小柳兎との情交を

見つけられ、捨てられてからは落ちぶれる。㊟阿珠。㊟阿金大。

周双珠 公陽里。周蘭の三番目の娘、落ちついた温順な奴。客は洪

善卿の他に喬老四。㊟阿德保。㊟阿金。㊟巧紈。

周双宝 周蘭の抱え。お茶ひきで冷遇される。のち尻に身請けされる。

周双玉 周蘭の抱え。もと半玉、美貌をたのみ驕慢。朱淑人を旦那に

してからその正妻になろうとし、ついに無理心中をはかる。㊟阿珠

孫素蘭 兆貫里。客は華鉄眉であるが、頼三公子に暴れこまれても助

けてもらえず、一笠園に逃げこむ。孤独の身を悲しんで、琪官・瑤

官と義姉妹になる。㊟金姐。

袁三宝 清和坊。喉のよい半玉。

馬桂生 十九歳。慶雲里。公二。姚季尊の家の女中の親戚に当たる。

姚夫人の信任を得て、季尊を旦那にする。

林素芬 尚仁里。旦那は朱蕩人。

林翠芬 素芬の妹。半玉。尹痴篤が張秀英と親密なので嫉妬する。

蔣月琴 東公和里。年増。羅子富と切れても意に介さない。㊟阿虎。

黄翠鳳 はじめ尚仁里。気が強く悪辣しかも細心。客から金を搾り取るのが芸者の使命と心得ている。旦那は羅子富。ほかに意中の入、

銭子剛がある。母は黄二姐。㊟趙家梅。㊟小阿宝。自前となって兆

富里に移る(階下に文君玉がいる)。

黄珠鳳 翠鳳の妹芸者。お茶ひきなので憎まれている。

黄金鳳 半玉。売れっ子であるので、翠鳳に可愛がられている。

黄二姐 芸者あがりの女将。七姉妹ちゅうの二番目。翠鳳たち三人を抱え、一時は諸金花を置いたこともある。男関係がだらしなく、混

江竜はその情夫。したたか者ではあるが、翠鳳には一目おいている。

呉雪香 東合興里。わがままでが子供っぽさを失わない妓。葛仲英と

の間に子をもうける。㊦小妹妹。

張蕙貞 もとは公二？ 王蓮生の援助で東合興里大脚姚の家を借り、

自前となる。凡庸で気が弱い。蓮生の妾となって公館に迎えられる

が、後、蓮生のおいと通じて殴られる。㊦阿巧。

潘三 居安里。野雞。客は夏余慶・徐茂榮など多い。匡二をそその

かし、李鶴汀の物を持ち逃げして共に消え失せる。

郭孝婆 郭ばあさん。もと芸者。かつての七姉妹ちゅうの最年長者。

いまは老残の身で淫売の客引きや女術をやり、牢屋にいれたこと

ともある。諸三姐が諸金花を虐待する手伝いなどもする。

李淑芳 東興里。陶玉甫が後妻に迎えようとしたが周囲の反対で実現

せず、煩悶から肺病となり死ぬ。実母は李秀姐、弟もある。㊦大阿

金、㊦阿招、㊦桂福。浣芳はその義妹。

李浣芳 十二歳。半玉。あどけない少女。陶玉甫になつている。

覃麗娟 西公和里。陶雲甫との仲は淡々。

金巧珍 同安里。実姉の愛珍と仲よし。客は陳小雲。㊦阿海。㊦銀大。

金愛珍 東棋盤街繪春堂。愛嬌たっぷりの公二。

楊媛媛 尚仁里。二階には趙桂林が住んでいる。旦那の李鶴汀は賭博

狂なので、同様、賭博が好きらしい。㊦盛姐。

尤如意 公陽里。賭博場を開いている。

屠明珠 鼎豊里。老いて引退しかかった金持の芸者。㊦鮑二姐。

諸三姐 かつての七姉妹の三番目。娘の諸十全をしろうとに仕立てて、

李実夫を欺き、実夫からとった金で諸金花を抱える。

諸十全 大興里。人家人(しろうと)。梅毒にかかっているが外見は顕

著でない。かえって客の李実夫が猛烈な症状を現わす。

諸金花 諸三姐の抱え。はじめ黄二姐の家に託されたが稼ぎがないの

で、公二に格下げし、東棋盤街の得仙堂に住み替えとなる。

趙桂林 尚仁里。楊媛媛の家の二階に住む公二。アヘン中毒の年増

商売はほとんどないが、うまうまと方蓬壺に嫁ぐ。㊦外婆。

蘇冠香 寧波の人の妾であったが逃げ出し、芸者をしているところを

捕えられた。斉韻叟に助けられ一笠園にいる。韻叟の妾の蘇翠香は

その実姉。㊦小青。

趙二宝 十五歳。趙樸齋の妹。勝気で虚栄心が強いが、また誠実で親

孝行。路頭に迷う兄を救うべく上海に出、施瑞生に欺かれて芸者と

なり鼎豊里で看板を出す。史天然の言を信じ廃業して結婚の準備を

するが、捨てられ、莫大の借金を負う。さらに頼三公子にへやをた

たきこわされ、絶望する。㊦阿虎。㊦阿巧。

洪氏 趙樸齋・趙二宝の母。洪善卿の姉。老齡、病の床につく。

張秀英 十九歳。張小村の従妹。張新弟の姉(同じ母かどうかは不

明)。施瑞生は義理の兄。趙二宝とともに上海へ出、芸者となる。家

は西公和里、覃麗娟の向かいの部屋である。客は尹痴鴛。㊦阿金大。

文君玉 兆富里。自前になった黄翠鳳の住いの階下。地方から出て

来たばかり、詩人きどり。方蓬壺の弟子。

姚文君 東合興里大脚姚の家にいる。芝居がうまく活発。客は高亜白。

頼三公子にねらわれて一笠園に逃げこむ。

阿巧 呉雪香の娘嬢の小妹妹のめい。いなかから出て来て、衛霞仙

の大姐となったがつづかず、張蕙貞のところへ移る。その後、趙二

宝の家に転じ、趙樸齋といひ仲になる。

阿珠 沈小紅の娘嬢。男の子があり、いつも張蕙貞の家へスパイに

行っている。のち小紅と争い、周双珠・周双玉の家へ移る。

目次

主要人名表	前付七
自序	二
第一回 趙樸齋 鹹瓜街に扇をたれ 洪善卿 聚秀堂に媒を做す	三
第二回 小夥子 烟を装めて空しく一笑し 清信人 酒を喫まんと枉しく相識る	二
第三回 芳名を議し小妹 招牌を附し 俗礼に拘り細慮 首座を翻す	一九
第四回 面情を見て代庖 買辦と当り 丟眼色して喫醋は包充く	三七
第五回 空当を塾め快手 新しき飲と結び 住宅を包り調頭に向き好を喃く	三五
第六回 田魚を養む戯言 善き教を徴し 老鴛を管る奇事 常の情に反す	四〇
第七回 悪き圈套 迷魂の陣を罩しき 美しき姻縁 薄命の坑と填成る	四六
第八回 深き心を蓄め紅線の盒を劫留り 利き口を遅し七香の車を謝却る	五三
第九回 沈小红 張蕙貞を拳翻し 黄翠鳳 羅子富と舌戦す	七〇
第十回 新粧を理め討人に訓導を厳くし 旧債を還すに清客も機鋒 鈍る	七六
第十一回 乱に鐘を撞ち比舎 虚しく驚かされ 齊しく案を挙げ聯襟 厚き待を受く	八六

第十二回

冤家に背れ和事老を拜煩し
鬼戯を装ち踏謡娘を催転す

第十九回

錯って深心を会し両情 次拾け
強いて弱体を扶し一病 纏綿る

第十三回

挨城門の陸秀宝 開宝し
抬轎子の周少和 碰和す

第二十回

心事を提べ鏡に對して謔言を出し
情魔を動かし同衾 噩夢に驚く

第十四回

単は単を折き単嬢は明に侮を受け
合は合を上え合賭は暗に謀を通す

第二十一回

失物を問い客を瞞き詐つて鐵を求め
帰期を限られ妻を恐れ偷に酒を擲う

第十五回

屠明珠 公和里の局に出
李夷夫 花雨楼に開灯す

第二十二回

洋錢を借り身を贖うこと初めて識 定まり
物事を買うに賭嘴して早くも和を傷つく

第十六回

撮便宜の大戸 果毒を種け
打花和の小娘 消遣に陪る

第二十三回

外甥の女 背後の言を聴き来たり
家主婆 當場で醜を出し尽くす

第十七回

別に心腸ありて私に老母を譏り
何の面目を將て重て 賢甥を責めん

第二十四回

只 冤を招くを恐れ同行 相護り
自ら落魄に甘んじ路を失うも誰か悲しまん

第十八回

夾襖を添うる厚誼はすなわち情を深め
双極を補う卓財はよく慍を解く

第二十五回

前事を翻し捨て白は更に情多く
後期を約し落紅 誰か語を解せん

第二十六回 三〇九

真の本事 耳際にて夜 声を聞き
仮の好人 眉間に春 色を動かす

第二十七回 三二七

飲 場を擲し酔漢 喉より吐空し
孽冤を証し淫媚 手 焼炙る

第二十八回 三三五

局賭 風露れて巡丁 屋に登り
郷親 色を削し嫖客 車を拉く

第二十九回 三三三

間壁隣居 兄を尋ねて伴と結り
過房親眷 妹を挈れて同じく遊ぶ

第三十回 三四三

新住家 客棧にて相帮を用い
老司務 茶楼にて不肖を語る

第三十一回 三五〇

長輩は埋怨みて親情 断絶し
方家は貽笑れて臭味 差池

第三十二回 三五六

諸金花 法に効い皮鞭を受け
周双玉 情を定び手帕を遺る

第三十三回 三六六

高亜白 詞を填り狂って地に擲ち
王蓮生 酒に酔い怒り天に冲す

第三十四回 三七四

真誠を瀝し淫凶 甘んじて罪に伏し
実 信に驚き仇怨 激して成親す

第三十五回 三六二

烟花に落ち貧を療すに上策なく
煞風景 善く病むに 同情あり

第三十六回 三六一

絶世の奇情 打って嘉耦と成り
回天の神力 仰いで良医に仗る

第三十七回 三九二

惨に刑を受け高足 枉く師に投じ
強て債を借り鬮毛 私に妓に狎る

第三十八回 三七七

史公館 痴心 好事を成し
山家園 雅集 良辰を慶く

第三十九回 三五五

浮屠を造り酒籌 水閣に飛び
販唱を羨み漁艇 湖塘に闘う

第四十回 三三

玩賞を縦にし七夕 鵲を橋を填め
俳諧を善くし一言 雕箭に貫る

第四十一回 三三

繡閣を衝き悪語 三画を牽き
瑤觴を佐け陳言 四声を別つ

第四十二回 三〇

鸞交を拆き季淑芳 世を棄て
鶴難を急え陶雲甫 喪に臨む

第四十三回 三六

其の室に入れば人は亡く物は在るを悲しみ
斯の言を信じて死別に生きて還るを冀う

第四十四回 三五

勢豪を賺く牢籠の歌一曲
貪黷を懲し挾制る価千金

第四十五回 三六

成局 忽ち翻り度婆 色を失い
旁觀して不 忿 雛妓の争風

第四十六回 三七

児婿を逐い乍ら新伴侶と聯び
公祭に陪り 重ねて旧門庭を踏る

第四十七回 三九

陳小雲 運 貴人に遇い亨る
吳雪香 祥 男子を占い吉なり

第四十八回 三八

誤の中の誤 侯門 海よりも深く
欺き復欺く 市の道 雲よりも薄し

第四十九回 三六

明は棄て暗に取り瞞賊を獲竊い
外に親しみ内を疏じ挾質を謀る

第五十回 三〇

軟と断纏き意有つて訛頭を捉え
悪く打盆し端無く毒手を嘗む

第五十一回 四二

胸中の塊 穢史に牢騷を寄せ
眼下の釘 小窰 籠箆を争う

第五十二回 四八

小兒女 独宿して空房に怯れ
賢主賓 長談して共榻に邀う

第五十三回 四六

強いて扭合す連枝姉妹の花
乍ら驚き飛ぶ比翼雌雄の鳥

第五十四回 四三五

負心郎は模倣に眷属を睥び
失足婦を鞭筆ちて綱常を整う

第五十五回 四四三

婚約を訂び即席意
私情を掩ひ同房顔 忸怩

第五十六回 四五一

私窩子の潘三 杖篋を謀り
破題児 姚二 勾欄に宿る

第五十七回 四四九

甜蜜蜜 醋瓶頭を騙し
狼巴巴 沙鍋底まで問う

第五十八回 四四六

李少爺 積世資を全傾し
諸三姐 瞞天説が善撒

第五十九回 四七四

文書を攫うに連環計を借り用い
名氣を擗ぐに和韻詩を題するを央む

第六十回 四八二

老夫 妻を得 煙霞の癖有り
監守 自ら盗み雲 水 蹴 無し

第六十一回 四九〇

筋骨を舒べ穿楊聊 技を試み
聰明に困み菊に對し詩を苦吟す

第六十二回 四九八

大姐に偷け床頭 好夢を驚かし
老婆と做り壁後 私談を洩らす

第六十三回 五〇六

集腋成裘 良縁 湊合り
移花接木 妙計 安排す

第六十四回 五二四

喫閃氣 怒つて總臂金を拵て
暗傷中れ猛 窩心脚を踢らる

跋 五三三

参考地図 五三三

解説 五三五

あとがき 五三七

海^{かい}
上^{じょう}
花^か
列^{れつ}
伝^{でん}

太^お 韓^{かん}
田^た 邦^{ぱう}
辰^{ちん}
夫^お 慶^{けい}
訳 作

自序

或ひと謂う、六十四回結ばずして結べるは甚だ善し、願、既に全書と曰うに、簡端また序なきは、すなわち闕くるなからんや、と。

花也憐儂曰く、是、説あり。昔、冬心先生の続集の自序に、多くその生平遇う所の前輩聞人の品題贊美の語を述ぶ。僕まさに斯の例を援きて以て之を為し、かつ推して之を広めんとす。凡そ吾書を読んで中に得ることある者は、必ずや言うを已むる能わず、その言うや、徒に品題贊美の語のみならざらん。我を愛すること厚く、我を教うること多ければなり。苟も吾の疵を扶り、吾の覆えるを發し、吾の蹟を振り、吾の疇を起こす以あらば、呵責唾罵、訕謗諷嘲に至ると雖も、皆當にこれを簡端に録し、以て吾書の真を存すべし。敬んで同人に告ぐ、金玉を闕す毋れ、と。

光緒甲午（一九〇〇）孟春、雲間の花也憐儂、九天珠玉の樓に識す。

第一回

趙撲齋 鹹瓜街に舅を訪れ
 洪善卿 聚秀堂に媒を做す

この長編小説は花也憐儂の著わしたもので、その名を『海上花列伝』という。いったい上海というところは、開港以来、紅灯の巷が日一日と繁華に向かっているので、そこに遊ぶ子弟で、馴染のために前途を誤り、家を外にして流浪する者が、数知れぬほどである。親、兄弟が禁じようと、師友が諫めようと、聞きいれない。これは、その者が頭迷なためであろうか。いな、ただ迷える者のために身を現じて説法する一経験者が得られないにすぎないのである。かれらが目で挑み心に許す、くさぐさの綱繆のさなかにあつては、当人は拘めどもききせぬ滋味を覚えるのであろう。しかし、ひとたびそれを筆にし描きだせば、嘔吐をもよおすほどいやらしく感じられるに違いないから、興味索然として、いままでのことを忘れ去り、みずから正道にたちもどらない者があるであろうか。花也憐儂は菩提心を備え、長広舌をふるい、姿を描いては精神を伝え、つきつきに事件を連ね、配置を工夫しては人物を浮き彫りにして、生けるがごとく躍動せしめた。しかもなお一点の淫らな汚らわしい文字がないのは、これもまったく訓戒の主旨から離れていないからである。もし読者がこの小説の筋を細かにたどりながら、その意を会得したならば、眼前の西施眉代の越の美女よりもなまめかしい女が、背後では夜叉よりも凶悪であることを知ることができ、今日の糟糠の妻よりも甘い者が、他年の蛇蝎よりも毒あ

ることをトすることができよう。このような次第であるから、この小説は、まず、眠りをさます暁の鐘とでもいえるのではなからうか。これが『海上花列伝』の作られた所以である。

読者諸君よ、この花也憐儂とは、さていかなる者であろうか。

そもそも、いにしえの槐安國の北に黒甜郷があり、その主を趾離氏と称した。この者は、かつて仕えて天祿大夫となり、昇進して醴泉郡公に封ぜられたが、やがて衆香國の溫柔郷に流寓し、みずから花也憐儂と号した由である。ゆえに花也憐儂とはじつは黒甜郷の主人であつて、日、夢の中で暮らしていたが、自分ではあくまでも、それが夢であると信ぜず、真実のことだと思ひこんで、この作品を作りはじめたのである。そして、この一冊の夢中の書を完成するにおよび、はじめて、かの一場の書中の夢から呼びさまされたわけである。読者諸君も、夢ばかり見ていず、試みにこの本をひもといても、悪くはありませぬ。

というわけで、この本はすなわち花也憐儂の一夢よりはじまるのであるが、さて、花也憐儂が、どうして夢の中にはいつたかは、わからない。ただなんとなく自分のからだから、ふらふらして、つかまりどころもなく、さながら雲か霧にでも吹きつけられて、ころがって行くように感じられた。ふと、顔をあげて見ると、早くもとの所にはおらず、前後左右に一条の道も見当たらない。なんとその場所は、見渡すかぎり、果てしない花の海であった。

ここで知っていたきたいことは、この「花の海」という文字はいい加減にこしらえられたものではない、ということである。この海は見たところすこしの水もなく、ただ数かぎりない花が、枝葉をつけた

まま海面に漂い、平らかでふんわりと柔かく、あたかも褥が毛氈のごとく、海水を覆いつくしているのである。

花也憐儂には花ばかり見えて、水は見えなかつたので、うれしくて踊りだし、その海の広さがどれほどあるか、また深さがどれくらいあるか考えてみようともせず、平地の上にいるつもりで、いつまでもその場を捨て去るに忍びなかつた。ところがその花は、枝葉は繁茂しているも、根というものがなく、花の下がすぐ海水になつていて、流れるから、その海水に打ち寄せられると、花も波の間に漂い、流れ着くのに任せておくほかはない。蜂や蝶にもあそばされ、鶯や燕に欺かれ妬まれるような目にあわないにしても、かのばったくそ虫・けら・蟻といったたぐいのものに、思う存分、さいなまれ、乱暴狼藉をはたらかれるのである。ただその間にあって、桃花のごとく若々しく、李のように茂り、牡丹のごとく富貴なるもののみが、なお中流に卓立して群芳のために気を吐くことができるのであって、菊の秀逸なる、梅の孤高なる、蘭の空山にひとり芳しく、蓮の泥より出でて染まらざるがごときに至っては、どうしてすこしの屈辱にも耐えられようか。たちまちその中へ溺れ沈んでしまうのである。

花也憐儂はこの光景を見て感ずるところあり、愴然として悲しまざるを得なかつた。この一喜一憂が災いのもと、かえて自分をそね、心はいよいよ乱れ、眼はくらみ、頭がふらつくのを覚えた。そのうえ、虚空を吹き渡る風に当たつたので、からだはますますよろめき、アツと言う間に片脚を踏みはずすと、その花々の隙間から落ちて、ついに花の海の中に転倒してしまつたのである。

花也憐儂は大声をあげて、もがこうとするうちに、早くも数千丈を一気に下まで落ちこんでしまつた。はて、どこであるうかと目を見開いてみると、そこは上海で、ちょうど中国と西洋（租界のこと）の境界

をなす陸家石橋であつた。

花也憐儂は目をこすり、かかとを踏みしめて立つと、ようやく思ひだした。

——きょうは二月十二日。早朝に家を出、道をまちがえて花の海の中にまぎれこみ、もんどり打って倒れたが、さいわいにも倒れた拍子に目がさめた……。

それまでのさまざまのことを回想すると、ありありと目に浮かんでくる。自分ながらおかしくなつて、

「なんと長い夢を見ていたことか！」

と嘆息し、しばらくは首をひねっていた。

さて諸君よ、この花也憐儂はほんとうに目がさめたのでありまじうか。ひとつこの謎を当てていただきたいものです。ただ花也憐儂自身としては、たしかに目がさめたと思ひ、家に帰ろうとしたのであるが、どう行けばよいやらわからず、ぼんやりと橋をおりて来た。ちょうど橋のたもとまで来たとき、いきなり、ひとりの若者が、浅黄色のリンネルの筒袖に茶色のどんすの馬褂（羽織に似たもの）を着て、橋の下から一目散に駆けあがつて来た。花也憐儂は道を選けたが間に合わず、まっ正面からぶつかつてしまつたので、その若者はぱたりと地べたに倒れ、ひっくりかえつたとたんに、全身泥まみれとなつた。若者はすばやく飛び起きると、花也憐儂をつかまえて、さんざんにわめきののしり、花也憐儂が言いわけしても、耳にはいらぬ。そのとき黒もめんの制服を着けた巡査が、やつて来てわけをたずねた。若者、「わたしは趙樸齋という者で、これから鹹瓜街へ行くところです。ところがこのあわてん坊が飛びだして来て、わたしを突き倒した。この馬褂の泥を見てくださいよ。弁償してもらわなかつちゃ」



趙樸齋は橋のたもとの茶館に
はいって着物の泥をぬぐう

花也憐儂が答えようとしていると、巡查が、

「きみ自身も注意が足りなかったのだ。放してやりたまえ」

趙樸齋はまだなにやらぶつぶつ言っていたが、しかたなく手を放して、花也憐儂がひとことのあいさつもなく立ち去るのを、じっと睨んでいた。野次馬が町角にいっぱいになり、あれこれ噂したり、笑ったりしているの、趙樸齋は着物を振るいながら、いらだって、

「こんなさまでは、舅(母の兄弟)に会いに行けやしない」

と言うと、巡查も笑いだして、

「茶店でタオルを借りて、拭くんだな」

趙樸齋は、なるほどと気がついて、橋のたもとの近水台茶館にはい

り、通りに面した席について、馬褂を脱いだ。ボーイが湯をくんで来ると、樸齋はタオルを絞って、ていねいに馬褂を拭き、少しもしみの残らないようにして、ようやくそれを着た。それから茶をひと口飲み、払いをすませて立ちあがると、まっすぐに鹹瓜街の中ほどへやって来た。そこで永昌薬局の看板を見つけたので、石庫門(倉庫のような石門)をくぐり、大声で、洪善卿さんは？ とたずねた。丁稚がそれに答えて、客間に案内し、姓名を聞いてから、急いで奥へ知らせに行った。

間もなく洪善卿は忙しそうに出て来た。趙樸齋は久しく別れてはいないものの、かれのやせけた顔とどんぐり目とは見覚えがあったので、進みでると、おじさん、と言いながら、ひざまずいてお辞儀をした。洪善卿はあわてて礼をかえし、樸齋を起こして上座にすわらせると、さっそく、

「おかあさんはお元気かね。いっしょに来たのかい。どこに泊まっているんだ」

「宝善街の悦来館に泊まっています。母は来ませんでした。おじさんよろしく、とのことですよ」

話しているところへ丁稚がお茶とたばこを運んで来る。洪善卿が来意をたずねると、樸齋、

「べつに用件はないのですが、なにか商売でも探して、やってみようと思うのです」

「近ごろ上海じゃどんな商売もやりにくくてね」

「でも母が、人というものは一年一年と大きくなっていくのだから、家にいってもしかなかったがない。やっぱり外に出て商売でもしたほうがまだだよ、と言うのです」